

広島 Hiroshima Peace Forum 2018 2018
ピースフォーラム
CONTENTS

ご挨拶 2

スケジュール 0

廣島の発展

近代都市へ 0

日中戦争から太平洋戦争へ 0

広島城周辺の軍事施設配置 0

中国軍管区司令部 0

原爆投下への道

1. 原子爆弾の開発 0

2. 原爆投下目標の決定 0

3. 広島への原爆投下 0

4. 電気通信施設の被害 広島中央電話局 0

広島中央電話局西分局 0

5. 原爆被害の実相 原爆ドーム 0

レストハウス(元大正屋呉服店) 0

広島市役所本庁舎 0

被爆建物ウォーク 0

碑めぐり 00

ご挨拶

1945年8月6日、広島は、今年と変わらぬ“暑い夏の日”でありました。

しかし、午前8時15分、広島は、米軍が投下した人類史上初の原子爆弾によって一変し、地獄絵図と化したのです。原子爆弾から放出された膨大なエネルギーは、熱線、爆風、放射線となって襲いかかり、人々の日常と美しい広島を一瞬にして破壊し、14万人余の尊い命を奪いました。そして、辛うじて生き延びた多くの皆さんは、放射線障害や健康不安など心身に大きな傷を負い、社会的差別や偏見の中で苦難の人生を強いられてきたのです。



昨年7月、国連において国連加盟国の6割を超える122カ国が賛成し、「核兵器禁止条約」が採択されました。そして、その前文には「ヒバクシャに齎された受け入れがたい苦しみと被害に留意する」との文章が明記されたところですが、このことは、広島と長崎の被爆者の思いが世界を動かし、結実したものであります。

然るに、唯一の戦争被爆国である日本が、「核保有国の理解が得られず現実的ではない」として交渉にも参加せず、「署名は行わない」との方針を堅持し、「安全保障には核の抑止力が不可欠」として、米国の核の傘の下にある現状を是とする態度については、断じて容認できるものではありません。

8月6日の『平和宣言』で「松井一實・広島市長」は、原子爆弾を「絶対悪」と表現され、「地獄は、決して過去のものではない。核兵器が存在し、その使用を仄めかす為政者がいる限り、いつ何時、遭遇するかもしれないものであり、惨たらしい目に遭うのは、貴方かもしれません」と警鐘を鳴らされています。未だ世界には1万5000発もの核兵器が存在し、各地で頻発している紛争やテロなどを鑑みれば、その脅威はさらに高まっているとの認識に立つべきであります。

加えて、米・トランプ政権の、核政策の指針となる「核態勢見直し（NPR）」や、イラン核合意からの離脱、さらにはロシアとの核軍縮条約「新START（スタート）」を批判する動き等は、オバマ前大統領が進めてきた「核なき世界」を全否定するものであり、強い憤りとともに危機感を持つものであります。

このような国内外の様々な情勢変化の中で、情報労連は、「世界の平和を希求し、戦争の惨禍を風化させない」との強い決意のもと、今日まで「平和四行動」を中心とした取り組みを展開してきました。

とりわけ広島・長崎における行動は、核兵器・大量破壊兵器の廃絶に向けた取り組みであり、今年も、“73年前に何があったのか？”その実相を五感で感じて頂き、その想いを家族や職場の仲間に伝えていただきたいと思ひますし、“平和”を次世代へと繋いでいく“平和大使”となつていただくことに期待しメッセージと致します。

情報産業労働組合連合会
中央執行委員長 野田三七生

ご挨拶

ヒロシマは、今年も暑い夏を迎えました。

今から遡ること73年前の8月6日午前8時15分、人類史上初めてとなる原子爆弾により広島は瞬時に廃墟となりました。ヒロシマの人々は、この原子爆弾のことを「ピカドン」と呼んでいました。原爆がさく裂する前から大量に放たれていた放射線、3秒で地上を焼けつくした熱線、10秒で広島市の全域を飲み込んだ衝撃波。広島が壊滅するまでに要した時間はわずか10秒とされ、原子爆弾の影響による死亡者は原子爆弾が投下された年末までに14万人と推定されています。



昨年7月に国連において、無防備な市民を大量に無殺りくした兵器である原子爆弾は、国際法違反であると断罪した1963年の東京地方裁判所判決を礎とし、「三度（みたび）同じ惨禍を繰り返さない」という被爆者の悲痛な訴えが、世界を席卷し、核兵器を全面的に禁じる「核兵器禁止条約」として採択されました。唯一の被爆国である日本は世界に先駆け率先して「核兵器禁止条約」を採択するべきですが「核の傘」のもと日本政府は、米国と歩調をあわせ採決自体に参加しませんでした。

また、米国トランプ大統領は、本年2月に核戦略指針「核態勢見直し」を発表し、ロシア、中国、北朝鮮において核兵器増強を進める現状に対応するため、爆発力を小さくし、機動性を高めた新型核兵器の導入を明記するとともに、非核兵器による攻撃に対する核兵器による報復の可能性にも言及しました。このことは、歴代の政権がめざしてきた核兵器削減や使用回避を優先される方針を転換し、核兵器を「使いやすくする」極めて許しがたい方針転換を明らかにしました。安倍政権は、北朝鮮による核・ミサイル問題を背景に、トランプ米政権の核戦略指針「核態勢の見直し」について、抑止力を強化するものと歓迎する意向を表明しました。このことは、「核の傘」のもと国民の平和を同盟国に委ね、日本として核兵器の存在そのものを容認し、国際法違反とされる核兵器使用を肯定することは、断じて許すことのできない暴挙です。

私たちは、唯一の戦争被爆国として核兵器の非人道性を市民社会の一員として、被爆者とともに「核兵器の廃絶」と「恒久平和の実現」に向け、核実験があるたびに平和公園に集い「抗議の座り込み」による核兵器廃絶の意思を示し、平和学習会の開催、国際世論の喚起に向けた核兵器廃絶署名活動等様々な取り組みを展開し続けています。本日参加された情報労連加盟組合の皆様には、「戦争の悲惨さ」、「平和の尊さ」「被爆の実相」に触れていただき「平和な未来を築くため私たち一人ひとりが何をなすべきか」真剣に考えていただく一助になることを期待します。

情報労連広島県協議会
議長 大本 誠

■8月4日(土)

- 12:50 開場 (ワークピア広島)
- 13:30 ピースフォーラム
主催者代表あいさつ (情報労連中央本部)
- 13:40 導入学習
NTT労組広島原爆被爆者・二世協議会
- 14:10 被爆体験証言
証言者：NTT労組広島原爆被爆者・二世協議会
副会長 松木 忠生
- 15:20 特別講演「核兵器禁止条約の展望と課題」
講師：広島市立大学 広島平和研究所
准教授 福井 康人
- 17:00 閉会
- 17:15 慰霊式会場へ (バス移動)
- 17:45 慰霊式会場到着 (地元組合員も参加依頼)
基町 (全国参加組織代表者・退職者の会等)
袋町 (県協単組代表者・グル連組織代表者等)
比治山 (全国参加者等)
- 18:15 慰霊式終了後 バス移動⇒各ホテルへ

■8月5日(日)

- 8:40 各ホテル出発
- 9:00 平和記念公園到着
ピースウォーク ⇒ 広島平和記念資料館見学
5～9班は平和資料館見学 ⇒ ピースウォーク
- 11:20 バスでワークピア広島へ移動 (昼食休憩)
- 13:00 広島城 (中国軍管区司令部跡前&大本営跡等見学)・NTT十日市ビル・旧日本銀行広島支店・袋町小学校・日本赤十字病院・御幸橋・旧被服支廠⇒連合「平和ヒロシマ集会」会場へ
- 17:00 連合「平和ヒロシマ集会」開催 (広島県立広島産業会館)
- 19:30 連合「平和ヒロシマ集会」閉会后、バス移動⇒各ホテルへ

■8月6日(月)

- 8:00 まとめ集会会場集合
- 8:15 黙とう (「平和記念式典」へ映像にて参加)
- 8:45 原爆詩、被爆体験記朗読
- 9:15 広島グル連frage発表
「地図から消された島」
- 9:45 パネル展
- 11:00 まとめ集会開催
まとめあいさつ
(情報労連中央本部)
ピースリレー
広島アピール採択
閉会あいさつ
(地元実行委員長)
- 11:30 閉会 (アンケート回収)
<解散>



近代都市へ

明治維新による変革で、城下町広島は近代都市への第一歩を踏み出した。洋風の生活様式や文化が取り入れられるとともに、相次いで橋が架けられ、道路も整備され、市内を貫く国道沿いでは人々の往来や商業活動が活発化した。

1889(明治22)年には市制が施行され、全国で最初の市の一つとして、「広島市」が誕生した。

1894(明治27)年に開戦した日清戦争は、経済的發展を促し、活況をもたらした。同時に、広島は大陸への兵員・

物資の輸送基地として、にわかには脚光を浴びた。以後、軍の諸施設が設置され、軍都としての性格を強めていった。

戦争の勃発(ぼっぱつ)は、近代化に拍車をかけた。上下水道の整備やガス・電灯が普及し、1912(大正元)年には市内電車が開通した。レンガ造や鉄筋コンクリート造の建物が次々に建てられて都市景観を一変させ、1923(大正12)年には、都市計画法が適用されて、近代的な都市へ変貌(へんぼう)していった。



日清戦争で広島入りした明治天皇

錦絵「広島国会仮議事堂の図」/
1894(明治27)年

1871(明治4)年に設置された鎮西鎮台の第一分営は、1886(明治19)年第五師団と改称され、城内を中心に軍事施設が次々と置かれた。1894(明治27)年、日清戦争が開戦すると、第五師団は先陣をきって派兵された。広島は兵站(へいたん)基地として、全国各地から軍隊が集結し、宇品港から兵士や物資が送り出された。戦争が本格化した同年9月には、最高司令部である大本営が東京から広島城内に移された。急ぎ仮議事堂が建てられ、明治天皇が来廣し、10月には臨時帝国議会が開催された。この時期の広島は、まさに臨時首都の様相を呈した。

日中戦争から太平洋戦争へ

昭和期に入ると、大正時代の好景気の反動と世界大恐慌の影響によって、国内は深刻な不況に陥った。軍部は、国内の不況を打開するため、生活に苦しむ人々の関心を大陸へ向けた。

1931(昭和6)年の満州事変を契機に、中国との間で15年にわたる戦争が始まり、1937(昭和12)年には全面戦争に拡大した。第五師団は、先発隊として大陸での戦闘に加わり、その後も最前線で戦闘に参加した。広島では、さらに軍事施設の新設や拡充が行われ、造船や金属工業など軍需

産業が活発になった。

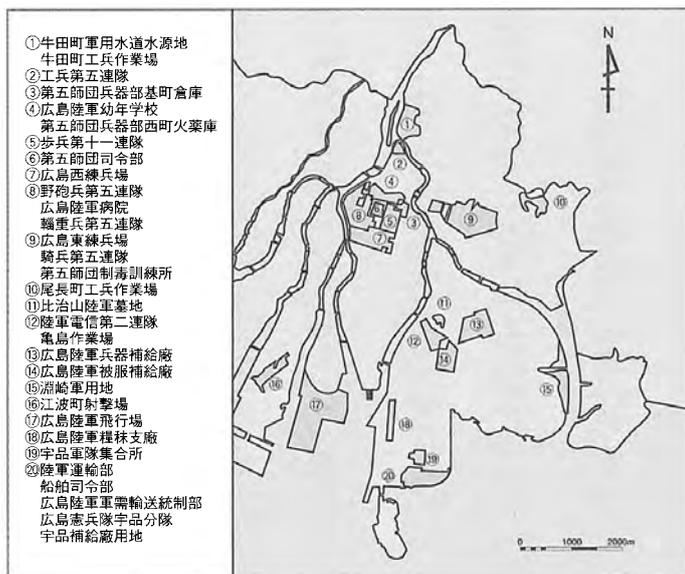
1941(昭和16)年12月、日本はハワイ真珠湾の奇襲攻撃とマレー半島上陸により、太平洋戦争に突入した。初期には戦況を有利に展開したが、1942(昭和17)年6月のミッドウェー海戦、8月のガダルカナル島の戦いに敗れてからは、次第に敗戦の色が濃くなっていった。戦局が悪化する中、1945(昭和20)年4月には、本土決戦に備えて設けられた第二総軍司令部が広島に置かれ、軍事基地としての重要性が増していった。



出征兵士の見送り

袋町/1937(昭和12)年頃

満州事変以降、日本全国が次第に軍国主義の波に洗われていくなかで、市内では出征兵士の歓送風景が各所でみられるようになった。日中戦争が始まると、広島港(宇品港を改称)には連日にわたって軍用船が出入りし、港は完全に軍用港として活動した。



軍用地の広がり

1943(昭和18)年

日清・日露戦争により、市内の軍事施設は急増し、陸軍運輸部、陸軍糧秣(りょうまつ)・被服・兵器の各支廠(ししょう)、似島検疫所、工兵作業場などが次々と設置された。施設は広島城・広島駅・宇品周辺に集中し、当時の市域の約10%を占めた。



兵士の遺骨帰還

紙屋町交差点/1938(昭和13)年

日中戦争が始まると、第五師団にも動員の命令が出され、兵士たちは中国各地を転戦した。兵士のなかには、生きて再び郷土の土を踏むことができない者もあり、多数の兵士の遺骨が無言の帰還をした。

広島城周辺の軍事施設配置

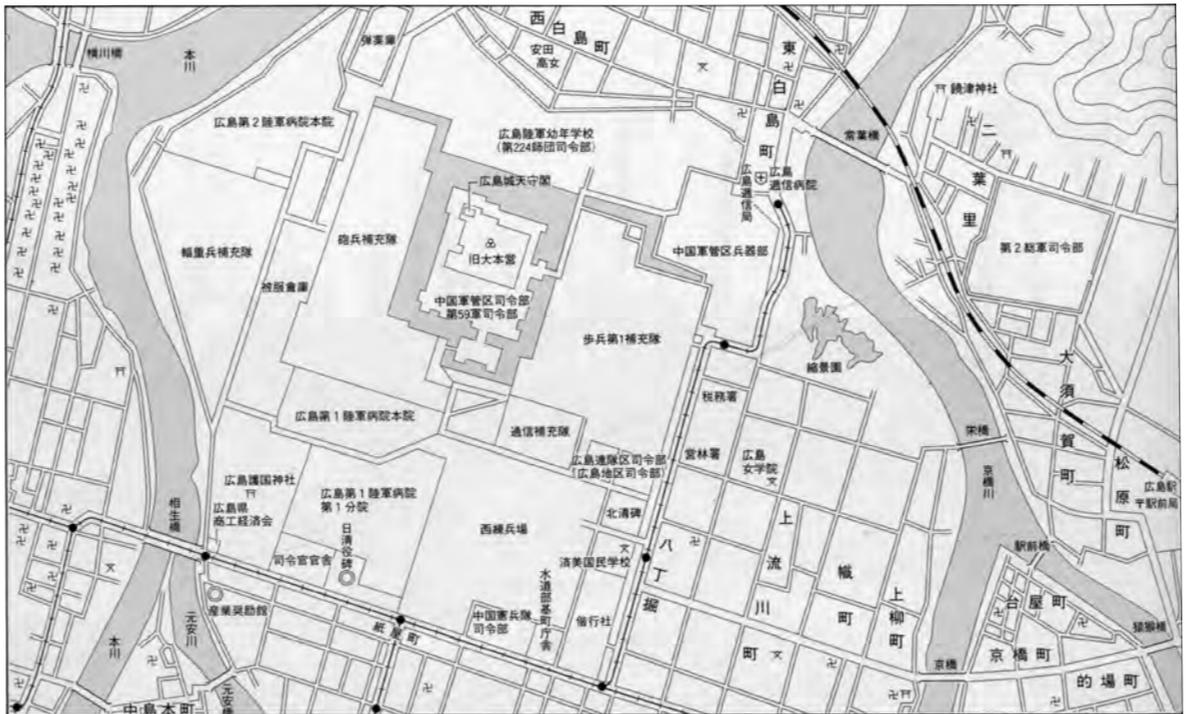
1871(明治4)年明治政府により鎮西鎮台の第1分営が置かれて以来、城郭一帯は陸軍の軍事施設が集積していく。1873年には第5軍管広島鎮台に昇格し、1888年には第5師団と改称された。国内の治安維持と防衛を目的とした鎮台制から、大陸での戦闘に対応できる総合兵力に改編したのが師団である。基町一帯には、第5師団に属する歩兵第11連隊、砲兵隊、輜重隊(しちようたい)、騎兵隊(きへいたい)、衛戍病院(えいじゅびょういん)(1937年に広島陸軍病院となる)、幼年学校などが配され、憲兵隊や兵器支廠(ししょう)(1918年に東新開へ移転)などもおかれた。南側には練兵場(1890年尾長・大須賀両村に東練兵場が設けられ、西練兵場となる)が広がり、兵舎や倉庫なども建ち並び、明治期に一帯は一大軍事拠点となった。

1894年に日清戦争が始まると本丸に大本営がおかれ、

西練兵場には臨時帝国議会仮議事堂が設けられた。

第5師団は日清戦争で先遣隊となり、その後も野戦師団として拡充され、大陸で戦火を交える。日中戦争で出動中には、留守第5師団司令部が本丸におかれていた。この司令部は数次の名称変更の後、本土決戦に備えて1945(昭和20)年6月中国軍管区司令部となった。中国軍管区には明治期の配置を引き継ぐ形で、歩兵、砲兵、輜重兵(しちようへい)などの各補充隊や陸軍病院などが配されていた。幼年学校は1928年に軍縮のため廃止されるが、1936年に再開し、翌1937年に城北の歩兵第71連隊跡に移転した。

このほか西練兵場の南側には中国憲兵隊司令部、東側には陸軍の互助団体が経営する偕行社(かいこうしゃ)附属済美(せいび)国民学校が位置していた。



①被爆当時の基町一帯の軍事施設の配置。



②城郭一帯に集積した軍事施設の全景。左が本川で、下に相生橋と産業奨励館が位置する。右下付近が爆心地となった。(1935年)



③一面の焼け野原となった基町一帯を北東上空から望む。上部のやや左寄りが爆心地。(1945年11月頃)

中国軍管区司令部

第5師団が日中戦争で大陸に出動中、本丸におかれていた留守第5師団司令部は、1940(昭和15)年8月軍制の改定によって広島師団司令部と改称され、1945年4月には広島師管区司令部、同年6月には中国軍管区司令部に昇格、本土決戦に向けめぐるしく態勢整備が行われた。このため司令部内では兵舎が不足し、一時天守閣も利用していたが、標的になりやすいとの理由から急遽(きゅうきょ)本丸下段に三角兵舎を建てて移った。

本丸上段には史跡の大本営跡や国宝の天守閣があるため、司令部の庁舎は本丸下段と二の丸に配されていた。本丸下段には司令官室や参謀部のある1号庁舎のほか、2号・3号庁舎、動員されていた比治山(ひじやま)高等女子学校の3年生が宿泊していた学徒通信隊宿舎、講堂などがあり、南側には半地下の防空作戦室が位置していた。二の丸には軍法会議を司る法務部が入る4号庁舎や拘置所(こうちしょ)があった。

軍司令部では毎週月曜日に大本営跡の広場で朝礼を行っていたが、8月6日は月曜日で、比治山高等女子学校の動員生徒の朝礼は軍関係者の前の午前8時から行われていた。90人が3交代制で勤務するため、およそ60人の生徒が朝礼に出て、竹槍(たけやり)訓練に移っていたとき原子爆弾は炸裂(さくれつ)した。1号庁舎の中央のレンガ部分と鉄筋コンクリートの拘置所の一部を残し地上の建物は壊滅した。半地下の防空作戦室も爆風で内部がめちゃくちゃになった。中で通信業務にあたっていた2人の女生徒によって被害の第1報が発せられた。軍司令部の職員700余人と比治山高等女子学校の生徒・教員64人が死亡し、拘置所の米軍捕虜も死亡した。

軍司令部は1945年9月1日、焼け跡から佐伯郡五日市町(現在の佐伯区)の岩国燃料廠(ねんりょうしょう)五日市出張所跡に移り、陸軍官制廃止に伴い11月末に廃庁となり、新たに第1復員省中国復員監理部として業務を開始した。



①本丸上段に位置する大本営跡の全景。(1930年頃)



②本丸に位置する第5師団司令部と大本営跡。(1928年)



③第5師団司令部1号庁舎。中央部がレンガ造。玄関前の車回しはまだ取り付けられていない。(1925年頃)



④被災した防空作戦室の入口付近。(1945年11月頃)



⑤1号庁舎中央のレンガ造部分だけが残る。(1945年11月頃)



⑥司令部跡は1950年に中央バレーボール場が造られ、庁舎の入口は観客席となった。(1951年頃)



⑦防空作戦室の内部を調査するアメリカ兵。(1945年11月頃)



⑧現在の旧防空作戦室の内部。(1994年)



⑨基礎だけが残る大本営跡。(1994年)

原爆投下への道



1 原子爆弾の開発

●原爆の誕生「マンハッタン計画」

ユダヤ系ハンガリー人の物理学者シラードは、ヒトラーが率いるナチスドイツが核爆弾を持つことを恐れ、当時最も有名な物理学者であるアインシュタインの署名をもらって、アメリカ大統領ルーズベルトに新型爆弾の開発を訴える手紙を送った。ルーズベルトはこれを認め、1939(昭和14)年10月にウラン諮問委員会が設置されたが、原爆はまだ現実的な兵器とは考えられていなかった。

1942(昭和17)年6月ルーズベルトはウランとプルトニウム両方の爆弾を開発する許可を与えた。陸軍がこれに加わり、グローブス准将が最高責任者として任命されて、軍の管理のもとで「マンハッタン計画」が始まった。



対日宣戦布告文書に署名するルーズベルト大統領

1941(昭和16)年12月ルーズベルトが原爆の開発を本格的に始めたのは1941(昭和16)年11月になってからだった。

1943(昭和18)年3月、グローブスはニューメキシコ州ロスアラモスに研究所を設立し、オープンハイマーを所長に任命した。住民から隔離され厳重な機密保持が保たれるなか、科学者が集められて研究に携わることになった。

ドイツの原子核連鎖反応の研究は、戦争初期にはアメリカより進んでいたが、1942(昭和17)年には原爆開発計画を断念していた。アメリカ政府はそれを知った後も、科学者には知らせずに原爆開発を押し進めた。

ウランの濃縮やプルトニウムの生産には大規模な工場が必要であり、民間企業の協力が不可欠だった。化学、金属、電機、自動車、石油、建設などいろいろな分野の大企業がほとんど参加し、1945(昭和20)年末までに約20億ドルが投資され、最大動員数は12万人以上にのぼった。国の総力をあげた「産・軍・学複合体」はその後の科学のありかたを変え、「マンハッタン計画」は今日では一般的になった巨大科学の出発点となった。

こうしてウラン爆弾1個とプルトニウム爆弾2個が完成したが、プルトニウム爆弾は構造が複雑なので、実験を行う必要があった。1945(昭和20)年7月16日、高さ30メートルの鉄塔にプルトニウム爆弾を設置して爆発させるトリニティ実験がニューメキシ



ロスアラモスの研究所

1945(昭和20)年7月

コ州アラモゴードの砂漠で行われ、世界最初の原爆実験は成功した。その結果は、ベルリン郊外でポツダム会談に臨むトルーマン大統領に暗号で伝えられた。

2 原爆投下目標の決定

1943(昭和18)年、ルーズベルトとイギリスの首相チャーチルは、原爆に関する情報をアメリカとイギリスで独占する取り決めをしていた。1944(昭和19)年9月、両首脳は今後とも原爆開発については最高機密とし、爆弾が完成すれば慎重に考慮したうえで日本に対して使用することを決めた。

1945(昭和20)年2月に米英ソの首脳はヤルタで会談し、ソ連のスターリンはルーズベルトの求めに応じて、ドイツ降伏の3か月後に日本に宣戦布告することを約束した。

1945(昭和20)年4月12日、ルーズベルトが死去し、副大統領のトルーマンが大統領に就任した。トルーマンは、このとき初めて原爆製造について知らされた。

4月27日、初めての標的委員会が開かれ、原爆の投下目標は、軍事都市で、爆弾の効果を正確に評価できるように、以前に空襲を受けておらず、被害がちょうどその市街地内にとどまるような規模なら望ましいとされ、17都市が標的として研究されることになった。

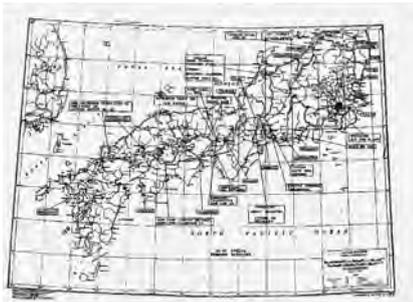
5月31日には、新たに組織された暫定委員会で、①原爆が日本に対してできるだけ早く用いられること、②労働者の家に取り囲まれた軍需工場の上に用いられること、③前ぶれなしで用いられることが決定され、京都、広島、小倉、新潟の4都市が目標とされた。これらの都市は、原爆の威力

を効果的に測定するために通常爆撃が禁止された。

のちに京都がはずされ、新たに長崎が加えられた。それは、千年間朝廷があり日本が誇る古都である京都に原爆を落とすと、戦後日本を占領するうえで日本人の協力が得にくいと考えたからだった。また、8月になって、遠くて規模が小さいという理由で新潟も目標からはずされた。

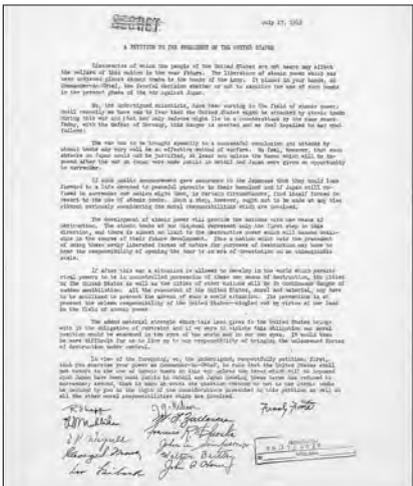
アメリカは、無線の傍受や暗号解読によって、日本が6月中旬からソ連を通じて和平工作を始めたことを知っていた。トルーマンは、原爆の完成により、ソ連の対日参戦がなくても日本を降伏させることができると考え、戦後ソ連の影響力が東アジアに及ぶのを阻止するために、ソ連の参戦前に原爆を投下しようとした。

トルーマンは、実験成功から9日後の7月25日に原爆投下の命令を下し、翌7月26日、日本に無条件降伏を要求するポツダム宣言が発表された。28日に日本政府はポツダム宣言を黙殺すると発表し、原爆投下は確実なものとなった。



原爆投下目標とされた都市

当初は17都市が候補とされ、最終的には広島、小倉、長崎の3都市とされた。



原爆使用に反対する科学者の請願

1945(昭和20)年7月

5月7日にドイツが無条件降伏したことは、ドイツに対する脅威から原爆を造ろうとしていた科学者たちに衝撃を与えた。科学者たちは、原爆の使用に反対を表明したが、原爆製造は完全に政府と軍に管理されていて、科学者の訴えは無視された。

3 広島への原爆投下

原爆を投下する特別部隊は、1944年(昭和19)年9月に編成され、熟練したB29のパイロットであるティベッツ大佐が部隊長に任命された。ユタ州のウエンドーバー基地で、4トンの重さの原爆を運搬するために軽く改造されたB29を使って、模擬原爆(パンブキン)の投下も含めた厳しい訓練が繰り返された。

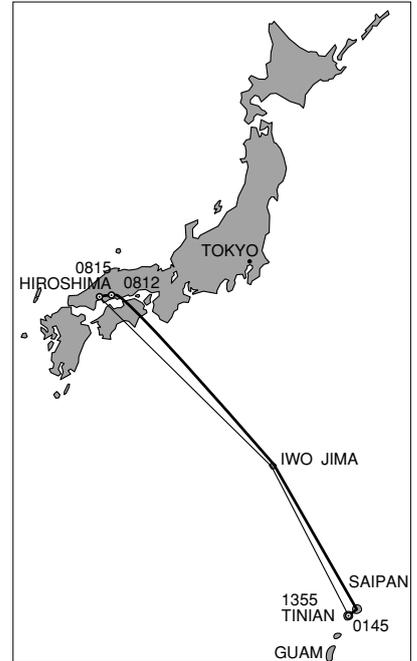
1945(昭和20)年7月初めにティベッツほか爆撃部隊が、また、7月26日にウラン原爆の砲身部分を積んだ重巡洋艦が、アメリカ本土から原爆投下の発進基地であるテニアン島に到着した。

8月2日に、「攻撃日を6日、投下目標を広島、小倉、長崎」とする最終命令が出された。

8月6日午前1時45分(日本時間)、機長ティベッツの母の名をつけた原爆搭載機B29エノラ・ゲイは、12名の乗員を乗せ、爆発観測と記録撮影のための随伴機2機とともにテニアン島を飛び立った。これより先に、3機の気象観測機が、それぞれ広島、小倉、長崎の天候調査に向かっていた。午前7時25分、広島の天候が良好との報告

が入り、この瞬間、広島は運命が決定した。

午前8時15分、エノラ・ゲイの爆撃手は、投下目標のT字型の相生橋を照準に捉えて自動装置のスイッチを押し、原爆は機体から離れて落下していった。43秒後、島病院の上空約600メートルで、人類史上最初の原子爆弾は炸裂(さくれつ)した。



エノラ・ゲイの航路図

テニアン島から広島までは約2,740キロメートルあり、B29爆撃機で片道6時間30分の飛行だった。

原爆投下前後の動き

1945年 7月16日 大東元帥が原爆投下命令(アメリカ・ニューメキシコ州アラモゴソ)の発令(原爆投下命令)を発令。7月16日、ワシントン近郊のワシントン州エドワーズ空軍基地からB29爆撃機「エノラ・ゲイ」が広島へ向けて出発した。

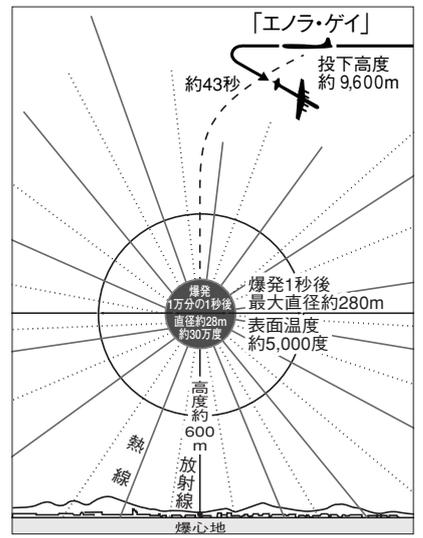
25日 原爆投下命令(アメリカの陸軍参謀本部から、ブリスコック少佐(空軍)へ)

26日 東京中、この日、日本の無条件降伏を求め「ポツダム宣言」を発表

28日 日本政府は、ポツダム宣言を「黙殺する」と発表

8月2日 アメリカ陸軍参謀本部が原爆投下命令(8月6日 日本攻撃、第11日 広島市街に投下)

8月5日 21:20 警戒解除命令
21:25 警戒解除命令
23:55 警戒解除命令
6日 00:25 警戒解除命令
01:00 警戒解除命令(1機のみ)
01:15 B29爆撃機「エノラ・ゲイ」が、原爆を投下してテニアン島を離れる(日本時間)
01:45 B29爆撃機「エノラ・ゲイ」が、原爆を投下してテニアン島を離れる(日本時間)
02:10 警戒解除命令
02:15 警戒解除命令
07:09 警戒解除命令(1機のみ)
07:30 警戒解除命令(1機のみ)
07:31 警戒解除命令
08:15 警戒解除命令(知られる前に、原爆が投下され、さくれつ)
8月9日 11:02 長崎に原爆投下(アロト)式
10日 日本総務省が「原爆投下は国際法違反」と抗議声明
14日 日本政府、ポツダム宣言を受諾し、無条件に無条件降伏
15日 日本政府、国民に戦争終結の通告
16日 終戦



原爆の投下

エノラ・ゲイは、広島市の北東方向から侵入し、原爆を落とすとすぐに、衝撃波を避けるために155度の急旋回をして北に飛び去った。



滑走路の
エノラ・ゲイ

4 電気通信施設の被害

●広島中央電話局

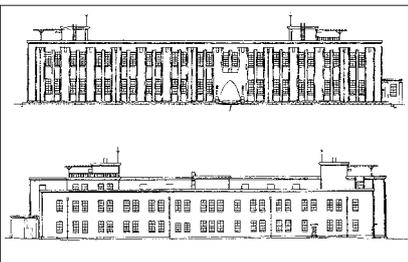
この電話局は広島市の市外交換と市中心部の市内交換を受け持つ局として1928（昭和3）年2月中（しもなかん）町に広島郵便局電話分室として完成した。設計者は広島通信局と同じ通信省（ていしんしょう）の上浪朗（うなみあきら）の折衷様式から国際派への過渡期に位置づけられる作風で、縦長の窓を連続させる美しい立面のデザインの局舎を、この頃東京三田・赤坂、大分などに設計しているが、この局舎はその典型的なものの1つであった。この建物は中庭が2つある日字型の平面で表通り（東側）の2階が交換室となっていた。

1939年に広島中央電話局と改称。戦争の末期には電話の新規加入は軍関係に限られ、既設の遊休設備と一般加入者から供出させた回線を軍用に充てていた。また局舎の防備のために周囲約30メートルの建物を疎開させ、電力室や交換室の窓には松材による防爆措置が施されており、局舎の被災に備えて福屋百貨店の地下にも重要加入回線が引き込まれていた。

被爆当日、在籍者544人（うち挺身（ていしん）隊員32人、学徒113人）中、出勤者は414人（うち交換課員350人）だった。被爆とともに金網入りの窓ガラスは吹き飛ばされ、天井の仕上げも落下し、器物は叩き付けられ、ほとんど全員が死傷した。中庭に避難していた100人は比治山に向かって避難した。軽傷だった広島庶務課長は重症者を激励し、遅れて比治山に向かった。途中倒れるものもあり、比治山に集合した



①戦前の西側正面。(1928年頃)

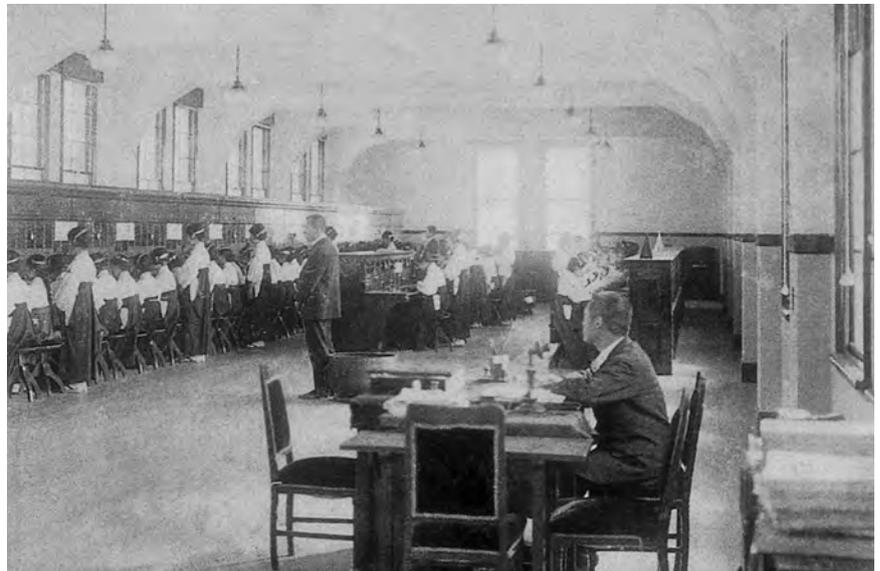


②立面図。(東、西側)

局員は約200人、在勤者の約半数であった。手当ての術も負傷者の収容所もなく、ここで各人分かれ分かれとなった。被爆による死亡者（被爆後10年まで）は108人だったが、3階で爆心地方向に面した監査課にいた職員11人は全員死亡した。その中で1人は爆風で3階から外へ投げ出され、門前の水槽まで吹き飛ばされたという。局舎は延焼によりコンクリートの躯体（くたい）を残して全焼した。

8月9日、暁（あかつき）部隊の応援により局内を清掃、死体の収容を手始めに残骸（くざんがい）整理を行った。さらに必要な機器を各所からかき集めて交換台を設置し、加入者の移転先を探しながらゴム線を架設し、局舎の窓から交換室に引き込むなどして、13日には14回線を試験開通させ、

8月末までに33回線を確保した。その後船越の日本製鋼所第二精心寮を借り入れ、ここに中継所、電信局、電話局を移転することが決まり、12月末には移転を完了し仮局舎を開設するが、狭隘（きょうあい）なため、1947（昭和22）年3月中（なか）町の局舎に復歸、被災前の約4分の1の規模で交換業務を再開した。1949年には1階に自動交換機が設置され市内加入電話は西局に遅れて、ここでやっと自動化された。その後、1954年に南電話分局が市内自動局として国泰寺町に開局、1959年には広島都市管理部が設置され広島中電話局と改称。広島都市管理部の庁舎としても使用されるが、1975年に廃局となり1982年に建物も撤去され、袋町電話ビル（現在のNTT袋町ビル）として改築された。



③昭和初期の交換風景。この電話局が自動交換になるのは1949年で、大勢の女性交換手が勤務していた。(1930年頃)



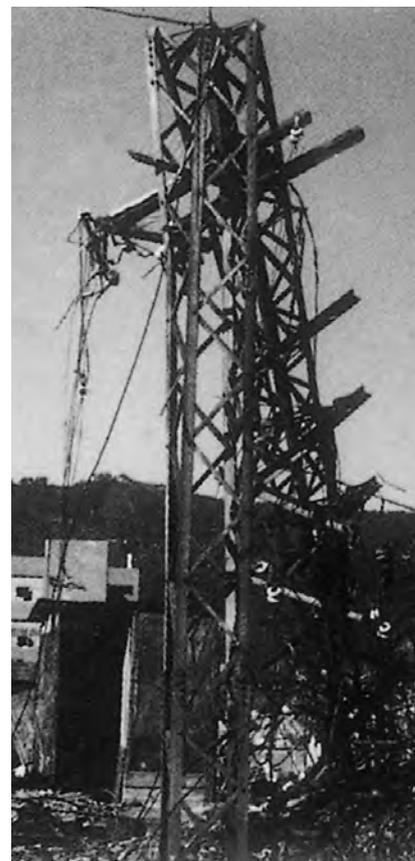
④2階の交換室の被災状況。北側を見る。木の床や交換台は完全に破壊されたが建物の骨格は残った。しっくい（しっくい）ははく落している。(1945年11月頃)

●広島中央電話局西分局

この電話局は逓信省の山田守の設計により1937(昭和12)年に工期10カ月という当時としては大変な突貫工事で完成、市内初の自動交換局として1939年2月に開局した。戦争の激化にともない、重要建物の防空措置として1階の電力室と2階の機械室には通常の防火シャッターのさらに外側に松の5寸角材による爆風よけを設けていた。

閃光(せんこう)の3秒後に爆風が局舎を襲った。2階の機械室の窓は防護用の角材もシャッターも破壊され、交換機の架は傾

き室内は破片で埋まった。外部からの延焼は免れたが、爆風によって窓枠が飛び込み2階の自動交換機、1階の電力機械と電池に相当の損害を発生した。負傷者は在室者の多かった3階の養成室と事務室に集中した。3人の女性が局内で死亡した。袋町の中央局も被災し、広島市内の電話は壊滅状態となった。西分局は調査の結果、設備端子のうち半数は修理すれば使用できることが確認され、1946年1月から修繕工事を行い8月には工事が完了し再開された。



③十日市交差点付近から西を望む。折れた鉄塔の向こうに西分局が見える。(1945年9月)



①南東側からの被災した外観。1階と2階の窓には木製の爆風よけが残るが、シャッターや窓枠の多くは吹き破られている。(1945年11月頃)



②被災した3階内部。柱と梁が整然と並ぶ頑丈な構造だった。天井からは電灯線だけが下がっている。(1945年11月頃)

5 原爆被害の実相

●原爆ドーム

原爆ドームのありし日の姿は「広島県産業奨励館」でした。

この建物は、チェコの建築家「ヤン・レツル」の設計で、1915(大正4)年4月に完成しました。

レンガ造りの建物は、グリーン色のドームを持つモダンな建物でしたが、原爆により骨

組みと壁を残し破壊されました。

あれから数十年、この建物は「原爆ドーム」と呼ばれ、ノーモアヒロシマの象徴としてその名を知られてきましたが、風雨にさらされてきた原爆ドームは、少しづつ崩れ始め、保存か撤去かの論議が繰り返されましたが「今のままの姿でドームを残そう」と、1967(昭和42)年全国から寄せられた募金5千万円で保存工事を行いました。

ところが、22年たって再び保存工事が必要となり、ドーム募金が始まりました。工事費2億円のうち1億円を予定していましたが、

4億円も集まり改めて世界の人々の平和を願う気持ちを知ることとなりました。目標を上回った募金は「基金」として、将来の保存工事に備えることとしました。

1990(平成2)年3月に保存工事は終わり、平和のシンボルとして生き続けております。

また、1996(平成8)年12月7日には、二度と同じような悲劇が起こらないようにとの戒めや願いを込め、ユネスコ世界遺産に登録されました。



被爆前



被爆後

●レストハウス(元大正屋呉服店)

この建物は、大阪に本店を持つ大正屋呉服店が、対岸の細工町から1929(昭和4)年3月新築移転したもので、木造家屋が主流の当時としてはめずらしい鉄筋コンクリートのモダンな建物でした。1~3階はショーウィンドウのある売場で土足が可能で、屋上からは市内が一望できました。

爆心地から170m、原爆により屋根が押しつぶされ、内部も破損、地下室を除いて全焼しました。しかし、爆心地の近くでありながら爆心地側に開口部のほとんどない強固な建物だったためか、基本的形態はとどめました。被爆当日、この建物には37

人が勤務しており、そのうち8人は傷つきながらも建物を脱出しましたが、たまたま地下に書類を取りに下りていた1人(1982(昭和57)年6月死亡)を除きその後全員死亡しました。

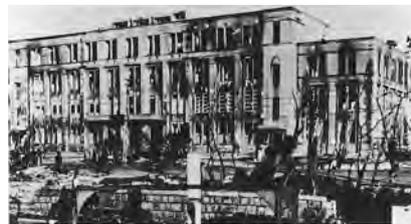
平和記念公園の建設に伴い、取り壊すかどうかの議論がありましたが、1957(昭和32)年に広島市が買収し、東部復興事務所として使用しました。その後大幅に改修され、1982(昭和57)年からは平和記念公園レストハウスとして使用されています。なお、地下室は現在も被爆当時の姿をとどめています。



現在の平和記念公園レストハウス

●広島市役所本庁舎

鉄筋コンクリート4階建ての市役所には、広島県防空本部が置かれていたこともあり、この周辺は建物疎開によって空地化され、焼夷弾などに対する防火体制は整えられていました。しかし、人類史上最初の原爆投下により猛火に包まれ、内部はほとんど焼きつくされ、中にいた数多くの職員が犠牲になりました。火災の収まった後は、助けを求める多くの負傷者を収容し、臨時の救護所となりました。



①被災した正面外観。(1945年末頃)



②ジープで玄関に乗りつけた占領軍兵士。中央の立っている人物が、写真提供者のH. J. Peterson。(1945年11月頃)



③内部が焼失した議場。火災によってしっくいのはげ落ちている。(1945年11月頃)

被爆建物 ウォーク

ポイント

- ★ 中国軍管区司令部跡(旧防空作戦室)
- ★ 広島大本営跡
- ★ 旧日本銀行
- ★ 袋町小学校 平和資料館
- ★ 広島陸軍糧秣支廠
- ★ 広島陸軍被服支廠
- ★ 御幸橋(御幸橋派出所前)
- ★ 広島赤十字病院

中国軍管区司令部跡(旧防空作戦室)

1871年(明治4年)、明治政府により城郭に鎮西鎮台の第1分営が置かれたことをきっかけに、次第に城郭の周りに軍事施設が集結してきました。大陸での戦闘に向け鎮台から師団に改編。1888年には第5師団として歩兵11連隊、砲兵隊、騎兵隊などが配備され、基町周辺は一大軍事拠点となりました。1894年に日清戦争が始まると、本丸に大本営が置られました。1945年6月、中国軍管区司令部に昇格。本丸下段には司令官室や参謀部のある1号舎のほか、比治山高等女学校の生徒が宿泊していた宿舎、半地下の防空作戦室がありました。爆心地から790メートルで被爆。半地下の防空作戦室も爆風で破壊されましたが、被害の第1報はここから発せられました。



現在の旧防空作戦室跡

広島大本営跡

大本営とは旧日本軍の最高統帥部のことで、明治27年(1894)に勃発した日清戦争の際に初めて設置されました。当初東京に置かれていましたが、開戦後の9月に広島に移されます。この戦争では、明治天皇自ら戦争指揮のために来広し、帝国議会も広島で開催されるなど、広島市は臨時の首都の機能を担いました。

広島大本営が置かれた建物は、もともとは明治10年(1877)に広島鎮台(ちんだい=当時の陸軍の編成単位。後の師団に相当)司令部として建てられたものです。日清戦争後、「広島大本営跡」として保存公開され、大正15年(1926)には史跡に指定されました。しかし、原爆投下によって周辺の建物同様倒壊し、現在は礎石だけが残されています。



広島大本営跡(大正後期～昭和初期)
(公財)広島市文化財団文化財課「ひろしまWEB博物館」より引用

旧日本銀行

日本銀行は日露戦争が終結した1905(明治38)年に広島出張所を水主(かこ)町の県庁の東隣に設置する。日清・日露戦争で大陸への兵站(へいたん)基地となった広島では景気が高揚し、また、第5師団や呉鎮守府などの国庫金の出納も頻繁となっていた。1911年には京都、金沢などとともに支店に昇格した。

業務の拡大に伴い1936(昭和11)年9月、袋町の電車通りに店舗を新築移転する。

被爆時、1、2階は鎧(よろい)戸を閉じていたため内部の大破はまぬがれたが、3階は開けていたため大破全焼した。3階に入っていた広島財務局の職員12名が死亡し、日銀では店内にいた5人が死亡している。2階にも延焼したが、南西隅を焼いただけで、堅牢(けんろう)な建物だったため、構造的被害はなかった。被爆当日は労務員室や食堂を臨時病室として負傷者を収容した。7日には店内の一応の片付けを終え、早くも8日から支払い業務を開始している。



①電車通りから北方向。焼け焦げた国泰寺の大木の向こうが日銀広島支店。(1945年10月上旬)



②被爆後の外観、北西側から。(1945年11月頃)



③炎焼した3階の事務室。(1945年11月頃)



④被爆後の営業室。(1945年11月頃)

袋町小学校 平和資料館

袋町小学校平和資料館は、建て替え前の西校舎を改装して造られています。

この校舎は、昭和12年(1937年)、当時としては大変近代的な鉄筋コンクリートの建物(地下1階地上3階建・水洗トイレ・ダストシュート等を備える)として完成しました。

昭和20年8月6日に被爆。原爆の凄まじい爆風と高熱により、外郭のみを残し廃墟となりました。しかし、数日後には、被爆者の避難場所・救護所となるとともに、本校児童・教職員の安否や地域の住民等の安否を尋ねる場となりました。燃える物はすべて焼失し、残っているのは、真っ黒に煤けたコンクリートの壁と床に散らばるわずかなチョークでした。人々はこのチョークで煤けた壁に「伝言」を記すしかなかったのです。どんな気持ちで伝言を記されたのでしょうか。

やがて、学校も復旧し、校舎が改修され、「伝言」は、黒板の裏にかくれ、あるいは漆喰で覆われました。その後、校舎は、「西校舎」と呼ばれ、多くの子どもたちを見つめてきました。そして、戦後50年以上を経て、袋町小学校は老朽化が進んだため、取り壊し、平成14年(2002年)広島市まちづくり市民交流プラザ等との合築施設として生まれ変わることになりました。このため、被爆した「西校舎」の一部を広島市立袋町小学校平和資料館として保存し、壁に残された「伝言」や被爆当時の炭化した木れんが爆風で歪んだ地下の鉄製のドア等を永久に保存することにしました。

平成14年4月、「西校舎」の一部は「広島市立袋町小学校平和資料館」と名を変え、新たな使命をもって開館しました。開館式において、私たちは、この平和資料館を大切に「保存」し、被爆の実相を「継承」し、平和を学び、世界に「発信」することを誓いました。



現在の袋町小学校平和資料館



伝言文字が記載されている壁

広島陸軍糧秣支廠

1897(明治30)年3月、宇品海岸通りに陸軍中央糧秣廠(りょうまつしょう)宇品支廠が創設された。1902年に陸軍糧秣廠宇品支廠と改称され、1906年宇品御幸通り西側に移転するため用地が確保された。倉庫、糧米所などの建設と合わせて、1911年3月にレンガ造の缶詰工場を建設した(開設したのは6月)。

糧秣支廠は兵士の食糧や軍馬の飼料を調達、製造、貯蔵、配送する施設で、特に牛肉などを処理し缶詰を製造する工場としては全国で唯一のものだった。当初はほぼコの字型に連続するレンガ造の東棟、南棟、西棟と、やや離れて立つレンガ造の北棟とを、鉄骨造で一体化した巨大な建物であった。内部は断肉場、煮肉場、製缶場、製品室などを備えていた。

最盛期には3,500人もの従業員が働いていたといわれるが、戦時末期には他の支廠への配置替えや疎開などで規模を縮小し、被爆時には農作業に動員された学徒等もいたが人的被害は軽微であった。しかし爆風はガラス窓を割り屋根の鉄骨を屈曲させるほどの力があった。空き家同然となっていたので、被爆者の救援活動に向かった陸軍船舶部隊が多くの重傷者を支廠内に収容した。



竣工した缶詰工場の南面。左は木造の本部事務所(廠舎)。(1911年頃)

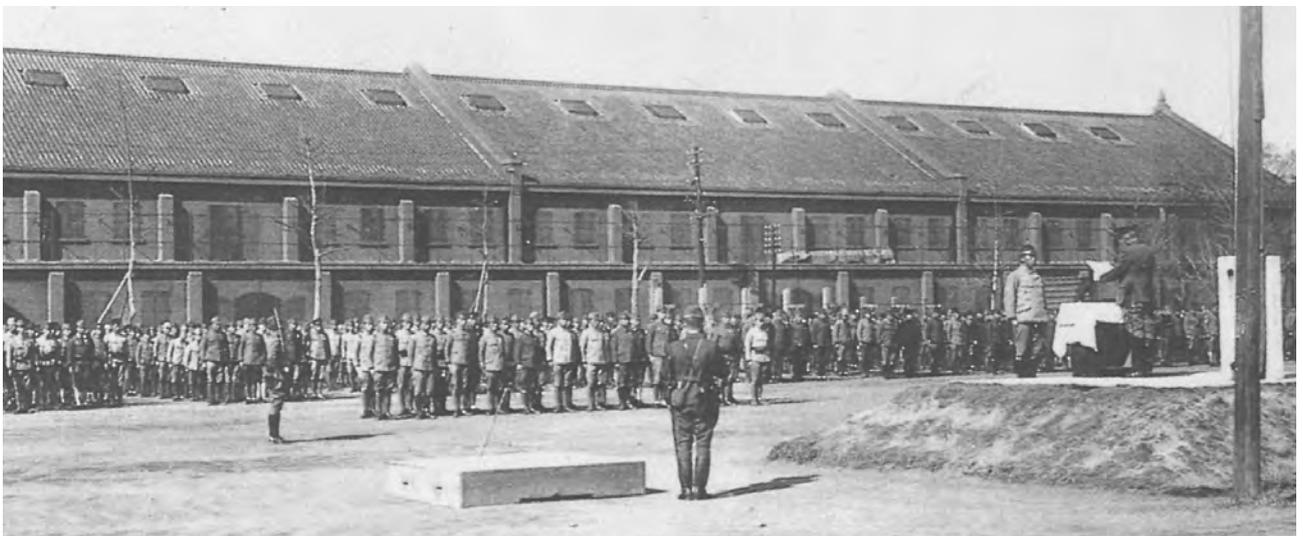


南西側からの正面外観。(1985年)

広島陸軍被服支廠

広島陸軍被服支廠は軍服、軍靴、軍帽、その他兵隊が身につける小物や付属品等を生産・修理・保管・供給する施設で、被服の大規模な製造修理工場と保管・供給を行う倉庫群がありました。

原爆の爆風により、屋根に大きな損傷を受けるも、火災はまぬがれ、被爆直後は、臨時救護所となって多くの被爆者がなだれ込み、次々と命つきていきました。西に面した3棟の鉄扉のいくつかには、被爆時の爆風で変型した痕跡をとどめています。



在郷軍人広島陸軍被服支廠分会の表彰式風景。(1944年2月)

御幸橋(御幸橋派出所前)

橋の西詰南側に鉄柵のしてあるところが有名な被爆直後3時間後の写真の舞台です。

この橋の名前は、1885年明治天皇行幸の際に建て替えられたことにちなんでこの名前がつけました。

1986年に旧御幸橋は解体され、派出所も1992年までありましたが、今では跡形も無くなっています。当時の欄干と写真がおいてあります。

多くの兵士にとっては、戦地に出発する時の橋として、また遺骨として無言の帰国をする時に渡った橋として、いずれにしても「帰らざる橋」でもありました。



その日の午前11時頃。(御幸橋西詰、爆心地から2.3km)



御幸橋。相生橋とともに最も広幅員の橋だった。(1935年頃)

ちなみに、この写真は、元中国新聞社カメラマン松重美人さんが、原爆直後の惨状を撮ったものの1枚です。松重さんは、「地獄化した爆心地でファインダーをのぞくと、苦しみにもがく被爆者がカメラを見たため、どうしてもシャッターが押せなかった。何故、こんなひどいことを。涙があふれた。報道としての使命感が頭をもたげ、悩んだすえ、五枚を撮った。」とおっしゃっています。

広島赤十字病院

爆心地から1.5キロ離れた、日本赤十字社広島支部病院は、1939(昭和14)年2月に鉄筋コンクリート3階建て、地下1階として竣工し、1945(昭和20)年8月6日原爆により窓ガラスは吹き飛び窓枠はねじ曲がり内部も大破し、隔離病棟・看護婦生徒宿舎などの木造建築物は全半焼したあと周辺からの類焼で全焼したが、本館・1号館・2号館は懸命な防火活動で類焼を食い止めた。収容中の患者250名中5名と病院関係者69名が犠牲になりました。被爆直後から多くの被爆者が救護を求めて集まり、救護活動22日間に延べ31,000人以上(陸軍病院でもあったこの病院には他病院以上の医薬品が備蓄されていたがたちまち使い果たした)になりました。



正面から熱戦を浴び、大火傷を負った少年の治療。(1945年10月)



赤十字病院とその周辺。付近はほとんど灰燼に帰し赤十字病院のみがたたずむ。(1945年10月上旬)

原爆犠牲者 慰霊碑

NTT基町
ビル

碑文

ひろしまの追憶は 世界の追憶であれ
ひろしまの嘆きは 世界の嘆きであれ
天地のくだけたる日のくるしみを 告ぐることなく
わが友は ここに眠る

原爆十周年にあたり
日本電信電話公社職員の心からなる
拠金によってこれを建つ

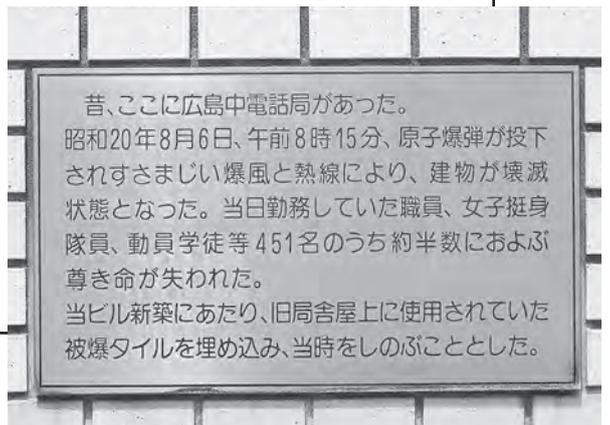


原爆犠牲者 慰霊碑

NTT袋町
ビル

碑文

昔、ここに広島中電話局があった。
昭和20年8月6日、午前8時15分、
原子爆弾が投下されすさまじい爆風と熱線により、
建物が壊滅状態となった。
当日勤務していた職員、女子挺身隊員、動員学徒等
451名のうち約半数におよぶ尊き命が失われた。
当ビル新築にあたり、旧局舎屋上に使用されていた
被爆タイルを埋め込み、当時をしのぶこととした。





広島搬送支社 関係職員 慰霊碑

NTT比治山
ビル

碑文

—広島や一灯もなく天の川—

この碑は、原爆直後に広島搬送電気通信工事局員 52 名の慰霊のために、
当時の局長中井秀基氏の自筆を刻んだもので、
原爆で亡くなられた友に贈る思慕の碑であり平和の祈りです。

「夜が来ると、暗い屋上に身を横たえては、
仏の数を数えるようになった。
—その仏の行方を追うかのように—
星が小さくまたたいた数が増えていく空の下で
それから銀の星が嬉しいものの一つとなった。」
中井氏随筆集「折りにふれて」より



1987 (S62) 年 8 月

NTT 電信搬送関係者有志

NTT 中国ネットワーク支社

